

## 西行歌風の特徴

—その表現について—

西村真一

一

西行の歌が初めて勅撰集に載ったのは『詞花集』で、

身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけり

が、「読人知らず」として出ている。

右の歌は、西行の特性がよくあらわれた歌として、しばしば引き合いに出されることがあるが、年少期の作にふさわしく、詠みぶりにもやや生硬な感じがあり、西行の作品の中でもとりわけすぐれたものとは必ずしもいい難い。

だが、西行がこうした歌によって歌人としての歩みをはじめたということは、注目に価する事実といわねばならない。なぜなら、西行の歌の中には、右の歌に典型的な形であらわれているような、独白あるいは自問自答の表現形式は数多く見られ、これを西行歌風の表現上の特色の一つに考えることもできるからである。こうした独白あるいは自問自答の表現形式が、初期の歌に端的にあらわれていることにわれわれは興味をひかれるのである。

『新古今集』に西行の歌は九十四首採られ、彼は集中第一の歌人とされている。しかし、藤原俊成・定家親子の系譜を当時の歌壇の

正統であるとするれば、西行はやはり傍流に位置する歌人であり、異端であるともみなされてきたのは、あながち不当な見方とはいえないであろう。西行の歌は、『千載集』から『新古今集』へと展開した当時の和歌史の上に、大きな足跡を残しつつも、なお内容と表現の両面において、独自の境地を拓いたところも大きかったと思われる。歌の本質においては、『新古今集』と深いところで結びつきながらも、表現の上で全く新しい方向へと踏み出しているところに、西行の和歌の史的な位置づけの難かしさがあるといえるのである。こうした西行の歌風の特徴については、これまででもさまざま論じられ、すでに論じ尽くされた感すらなくもない。しかし、表現上の問題については、なお検討すべき点もあると思われるので、この小論では、西行の作品にしばしば見出される独白あるいは自問自答の表現形式について考察を加えたい。

一一

改めていうまでもなく、『新古今集』の表現上の特色の一つは、初句切、三句切、体言止などの句法に求められる。この句切れからくるリズムについて、例えば西郷信綱氏は、五・七・五の上句と七・七の下句に一首が分れ、上句と下句とが互いに映発・反撥・照応

し、それがこのような句法と相まって「新古今」的なリズムを形成していることを指摘されている。<sup>②</sup>そこでいま、こうした見方に即して西行の歌をみると『新古今集』にも採られ、その代表的な秀歌と目されている次の歌などは、西郷氏のいわれる「新古今」的なリズムとまさしく合致するものといえよう。

降りつみし高嶺のみ雪とけにけり清瀧川の水のしら波

こころなき身にもあはれは知られけり鴨立つ沢の秋の夕暮

あはれいかに草葉の露のこぼるらむ秋風立ちぬ宮城野の原

津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

ところが一方、

又やみん交野のみ野の桜狩花の雪散る春のあけぼの

山里の春の夕暮きてみれば入相の鐘に花ぞ散りける

風かよふ寢覚の袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢

など、よく知られている『新古今集』の花の歌と、次にあげる西行の花の歌を比較すると両者の間のリズムの決定的な違いというものが、はっきりとみとめられるのである。

1 はなと聞くはたれもさこそはうれしけれおもひしづめぬ我が心  
かな

2 もろともにわれをもぐして散りね花うき世をいとふ心ある身ぞ

3 花にそむ心のいかで残りけむすてはててきと思ふわが身に<sup>③</sup>

4 願はくは花の下にて春死なむそのきさらぎのもちづきの時

5 ほとけにはさくららの花をたてまつれ我が後の世を人とぶらば

このリズムの違いということをはっきりさせるために、特に3、

4、5の三首の表現の特徴を考えてみよう。

この三首は、ともにほぼ同様の表現構造をもっている。すなわち、いずれも三句切であり、上句はそれぞれ疑問、願望、命令の形

による強い言い切りで終止し、一首の感動の中心はいうまでもなくこの上句にある。また詠みぶりに口語的な匂いがつきまとうのは、内面の思いをさながら独白の形で詠み下そうとするところに要因があると考えられる。3と4は『千載集』に、5は『統古今集』に採られているとはいえず、こうした歌のリズムは、勅撰集では異色のものに属する。事実、俊成の鋭い言語感覚は、西行の歌を至当に評価する一方でその歌の姿について批判を加えることも少なくなかった。たとえば5の歌について、俊成は「願はくはとおきて春死なむといへる、うるはしき姿にあらざ」(『御裳濯河歌合』判詞。圈点筆者、以下同様)と批評しているが、これらの歌にみられる生々しい心情表現が、あくまで歌の姿を第一とし、典雅優麗な歌を理想とした俊成によって批判されたのは、当然なことであったのである。

をしまれぬ身だにも世にはあるものをあなあやにくの花の心や右の歌なども、先の三首と同様の表現構造を有するものに数えてよいと思われるが、定家はこの歌について、「あなあやにくとおける人の常よむ詞には侍れどわざと艶なる詞にあらぬにや」(『宮河歌合』判詞)と、疑問をなげかけている。しかしその定家にしても、

世の中を思へばなべて散る花のわが身をさてもいづちかもせむという歌については、「世の中をおもへばなべてといへるより終の句の末まで句ごとに思ひ入りて作者の心深くなやませるところ侍れば」(『宮河歌合』判詞)と賞讃し、西行の歌の本質が、こうした内面の思いを吐露した独白の形にあることを認めていたのである。そして西行自身「わが身をさてもといふ歌の判の御詞に、作者の心深くなやませる所侍ればとかかれ候。かへすがへすおもしろく候ものかな。なやませると申す御詞によろづ皆こもりてめでたくおぼえ候」(『贈定家卿文』)と述べているところに、彼が、自己の歌の本

質がどのような点にあるかを充分知り尽くしていたことが知られるのである。

月は花とともに、西行の歌の主な素材であったが、この月の歌にしても、

鳩の海や月の光のうつろへば波のはなにも秋は見えけり

あしひきの山路の苔の露のうへに寝ざめ夜深き月をみるかな

などに代表される『新古今集』の月の歌と西行のそれとは発想や表現に大きな違いがみとめられる。

ゆくへなく月に心のすみすみてはてはいかにかならむとすらむ

ながむればいなや心のくるしきにいたくなすみそ秋の夜の月

ともすれば月すむ空にあくがるる心のはてを知るよしもがな

世のうきにひとかたならずうかれゆく心さだめよ秋の夜の月

前者においては、月は歌の美的世界を構成する一つの要素として歌の中に組み込まれているのに対し、後者においては、月は内面の思いを告白する対象であり契機であるという根本的な違いがある。従って、月によせてわが思いを告白しようとする西行の月の歌が、その表現形式において、しばしば独白の形をとるのは当然であろう。そして、このような独白の形は、花や月の歌に限らず、西行の歌にあまねく存在する表現形式であり、その独白性を検討することによって、われわれは西行歌風の本質に迫ることができると思うのである。

### 三

西行の独白あるいは自問自答形式の歌の意味を探るよりどころとしてもう一度冒頭にあげた歌に立ち戻ってみることにする。

この歌は、先に述べたように『詞花集』には凡卑の身を憚って「読人知らず」として出ており、その制作年代は、客観的事実としては、『詞花集』の奏覧のあった仁平元年、すなわち西行三十四歳以前の作としか推定することはできない。しかし、この歌が、「鳥羽院に出家のいとま申し侍るとて詠める」という詞書のある次の歌

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助

けめ

という歌ときわめて形が似ており、またほぼ同様の内容を詠んでいるところから、窪田章一郎氏が、おそらく出家の頃、つまり西行二十三歳頃の作であろうと推定されたのは、妥当な見解であると思われる。冒頭にかかげた歌や右の歌は、後にあげるいくつかの作と並んで、出家前後における一連の述懐歌の中に位置づけられるべきものであろう。

身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけり

惜しむとて惜しまれぬべきこの世かは身を捨ててこそ身をも助

けめ

改めて両者を並べて比較してみると、この二首が表現構造において酷似していることに気付かれる。二首とも「かは」という疑問形で上句が終っているが、この上句は、いずれも自己内部における命題の提起であり、下句はその命題の帰結である。また上句と下句は、直接スムーズに連続しているというよりは、内面における思索に費されたかなりの「時間」がその間に横たわっているとみるべきである。そして下句において、結論が独白の形式をとって強い調子で吐き出されており、典型的な独白あるいは自問自答の歌とみてよいで

あろう。そして、生硬な論理性をそのまま盛り込んだようなこれらの歌は、一首全体としてやや形象性が不完全であることは免れず、流麗なひびきなどとはおよそ縁遠いところに独自の世界を形成している感が強い。「詞句がいささか荒らかで、献上した歌ではなく、ひそかに私懐を陳べたのであろう」と伊藤嘉夫氏が評されているのももつともであらう。

出家前後を中心として、西行は右のような傾向の歌を少なからず試みている。そしてこのようにして試みられた表現形式は、やがて西行の歌風の特色の一つとして定着してゆくのであるが、それを実証するために、出家前後の述懐的な歌を考察してみよう。

いっばんに西行の伝記研究では、彼の生涯を五期に区分する見方が有力であり、それによれば、第一期は二十三歳の出家まで、第二期は出家以後三十歳頃までとされる。この説に基づいて、作歌の時期の推定できる歌を整理して、それらを通観してみると、出家前後の第一期、第二期の歌の中に、独白あるいは自問自答の形式の歌がしばしばあらわれている。それらをいくつか例示してみよう。

- 1 世の中をそむきはてぬといひおかむおもひしるべき人はなくとも
- 2 ずか山うき世をよそにふりすてていかになり行くわが身なるらむ
- 3 身のうきを思ひしらでややみなましそむくならひのなき世なりせば
- 4 うかれいづる心は身にもかなはねばいかなりとてもいかにかはせむ
- 5 世の中を捨てて捨てえぬこちしてみやこはなれぬ我が身なりけり

6 おもへこころ人のあらばや世にもはぢむざりとてやはといさむばかりぞ

7 あしよしをおもひわくこそくるしけれどあらるればあらければ身を

8 なりにける心こそなほあはれなれおよばぬ身にも世をおもはする

9 月をこそながめれば心うかれ出でめやみななる空にただよふやなぞ捨てがたき思ひなれども捨てていでむまことの道ぞまことなるべき

右のうち1は「世をのがれけるをり、ゆかりある人のもとへいひおくりける」という詞書により出家当時の作であることは明白である。2も同様に「世を逃れて伊勢の方へまかりけるにずか山にて」という詞書で、出家間もない時期の作と推定できる。3と4はともに「五首述懐」の中にあり、3には、家集によれば「出家の後よみ侍りける」という詞書がある。5、6、7の三首はその内容から出家当時の心境告白の歌とみられる。8と9は「百首歌」の中にあり、この「百首歌」は年少の時代の作と推定されているものである。10はその内容からやはり出家前後の作とみられる歌である。

西行の出家の原因はこれまでもさまざま論議されており、川田順氏は、

第一 一般厭世説

第二 恋愛原因説

第三 政治原因説

第四 綜合原因説

の四つにそれを整理され、結局さまざま要因がからみ合ったところで西行は出離を遂げたのであろうと綜合原因説を採られた。これ

に対し、風巻景次郎氏は、恋愛原因説を重んじようとされた。<sup>(8)</sup> ここでは、西行の出家の原因を詮議することが主眼ではないのだが、出家前後の歌を論ずるためには、やはり出家の要因について一応触れておくことが必要であろう。

説話の類によれば、西行は世の無常を觀じて翻然として世を捨てたように伝えられているが、これは余りに通俗的な西行像であり、事實には遠いものという他ない。一方、恋愛原因説は、

数ならぬ心のとがになしはてで知らせてこそは身をも恨みめ  
身を知れば人のとがとは思はぬに恨み顔にもぬるる袖かな

などの一連の恋歌に、秘められた上臈女房との恋を読みとろうとするところに立てられている。また、政治原因説は、西行が新興勢力の源平二氏の間介する佐藤一門の出身であり、さらに崇徳院の寵遇を得ているという複雑な立場から、将来おこり得る動亂を予測し、自ら俗世を捨てたと論ずるのである。そして、7などの歌には明らかに当時の「世」に対する意識がよみとれるというのである。

結論的にいえば、西行の出家は決して単一の要因によるものではなく、川田氏が綜合原因説と名づけたように、さまざまな要因が複雑にからみ合っているものとみるべきであろう。しかし、中でも恋愛原因説と政治原因説とが重視されるべきであり、出家前後の歌を理解する鍵もそこにあるように思われるのである。そして西行は世を捨ててに至るまで、「捨てて」ということについて、かなり長い間に亘って心的葛藤を経験し、わが身の世への在り方という根源的な問いについての深刻な思索と煩悶をくぐった末に、ようやく出離という行為に行き着いたとみたいのである。これを作品に即してみれば、出家前後の歌における自問自答の形は、まさに内面における問いと答であり、その論理的構造は、西行の思索の形式を反映し

ているのである。1、7、10などの歌の強い論理性はそのまま冒頭の歌などに重なるものであり、西行が生来、こうした思弁的な資質な持主であったことをわれわれに暗示させる。4の下句の「いかなりとてもいかにかはせむ」は、わが心を見定めかねた末の叫びともいべきものであり、西行には、他にもこうした調子の歌は少なくない。また6の初句の「おもへこころ」という、無理に自己をねじ伏せるような調子や一首につきまとう難解さも、心の軌跡をさながら示すものと見てよいであろう。

捨てるべきか捨てざるべきかという二者択一をめぐる問いは、青年西行にとって、数年を費す切実な課題であったと思われる。したがって、『台記』の「抑西行者、本兵衛尉義清也、以重代勇士仕法皇、自俗時入心於仏道、家富年若、心無愁、遂以遁也、人歎美之也」という記述をそのまま信ずることはできないのである。

内面の葛藤を経て、ついに西行は出離の途を択んだが、出家後も彼は俗世への捨て難い思いを抱きながら、京洛周辺で、半僧半俗の生活形態を続けたものと推定されている。<sup>(9)</sup> 出家後の数年間は、なお世へのなみなみならぬ関心を抱きつつ都と大原との間を往反していた彷徨時代であり、そしてこの時期の心の在り方を反映した歌が、4、5、9などに他ならない。

出家前後の西行の歌に独白あるいは自問自答の表現形式をもつものが比較的多いのは、この時期が、身の在り方、心の在り方について深刻な思いを巡らした時期であり、生活即作品という傾向の強い西行の歌に内面の思索の跡が著しく記しとどめられたのは当然であった。生来の知的、思弁的な傾向と出家当時の生活が密接に関連し、しかも西行が本来、対詠の作者ではなく独詠の作者であったことがそれに加わることにより、論理的、思弁的な要素の強い自

問自答や独白の歌が数多く詠まれるに至ったと考えてよいであろう。<sup>10)</sup>しかしながら、西行がいわば作風形成期ともいべき、第一期や第二期において、こうした傾向の歌を詠んでいる理由を考える時には当然、先行する時代の歌からの影響ということも併せて考えられねばならないであろう。そこで次にその問題についての考察にうつりたい。

## 四

西行歌風の形成における『古今集』の影響は、すでに指摘されている通りである。晩年、西行が蓮阿に語ったといわれる歌論書『西公談抄』の中で、西行は「和歌はうるはしく可詠なり。古今集の風体を本として詠むべし。中にも雑の部を常に可見。」<sup>11)</sup>と述べており、これは晩年の発言であるにせよ、その態度は若い時代から一貫していたとみてよいであろう。西行が重視すべきであると説いた『古今集』の雑歌には、官位の不遇や恋の不如意など、平安貴族の日常生活に発した嘆きや訴えを実感的に詠んだ歌が多く含まれており、『古今集』の他の部立の歌とはいささか趣を異にしている。それらの中には、独白的なひびきをもつ歌も少くないので次に少し例示してみよう。

- 1 とりとむる物にしあらねば年月をあはれあなうとすぐしつるかな
- 2 世の中は夢かうつつかうつつとも夢ともしらずありてなければ
- 3 世の中にいづち我身のありてなしあはれとやいはむあな憂とやいはむ
- 4 身をすててゆきやしにけん思ひよりはかなきものは心なりけり

1、2、3はともに「読人しらず」の歌であり、4は凡河内躬恒の作である。これらはいずれも、わが身の在り方を凝視し、それを詠嘆するところに発想の根源をもち、生活実感に基づく感懐を独白のような形で表現した歌であるところに共通性を有する。2と3は対句や対照表現を用いて、やや技巧的でありながらなお詠嘆の強さが迫ってくる歌である。1の「あはれあな憂」といった感動表現には口語的なひびきがあり、胸中の思いをつぶやくように表白しようとするところは、まさしく独白の歌というにふさわしい。4も同様にわが身への思いを独白の形で詠出した歌といえよう。右にあげた歌の他、

いく世にもあらじ我身をなぞもかくあまのかるもに思ひみだるる

しかりとてそむかれなくに事しあればまづなげかれぬあなう世の中

しりにけんききてもいとへ世の中は浪のさはぎり風ぞしくめる  
いかならんいはほの中にすまばかは世のうきことのきこえこざらむ

などの歌にみられる自由な表現方法に、西行は学ぶべきものを見出していると思われるのである。

『古今集』の他には在原業平や和泉式部の歌にみられる強い抒情性や奔放な表現技法が西行に及ぼした影響を無視できぬであろうが、ここでは、独白の表現形式のいう表現上の問題に限って、和泉式部と西行の作風の類似性を指摘するにとどめたい。

『和泉式部続集』に、「いかにせむとのみおぼゆるままに」という詞書を有する次のような歌がある。

なぐさみにみづからゆきて語らはむうき世の他にしる人もがな

なぞやこは石やいはほの身ともがなうき世の中を歎かでもへむ  
あさましや世は山河の水なれや心ほそくも思ほゆるかな  
身はひとつ心はちぢにくだくればさまさまものなげかしきか  
な

これらは恋愛感情を基底においた述懐の歌とでもいうべき性格の歌であるが、自己内部の屈折した思いをさながら吐露しようとする抒情性の強さは、必然的に表現にひろがり求め、その結果が「なぞやこは」とか「あさましや」という初句の強いひびきとなって表現されている。こうした独語（つぶやき）というよりはもっと激しい詠嘆の調子は、西行の歌にはしばしば見出すことのできるものである。

かきみだる心やすめのことぐさはあはれあはれとなげくばかり  
ぞ

右の西行の恋歌は、和泉式部の次の歌

忍ぶべき人もなき身はあるときはあはれあはれと言ひやおかま  
し

を本歌としていとされるが、この二首は単に句法の上で本歌と本歌取りの歌の関係にあるのみならず、もっと深い所で本質的につながるところがあるとみたいのである。

西行における独自の表現形式の先蹤としては、この他に曾弥好忠や源俊頼の歌が考えられる。西行自身、好忠の歌にどれだけ関心を寄せていたかは明らかでない。しかし、今川了俊の歌論書『了俊弁要抄』の中に注目すべき一節がある。すなわち了俊は「好忠・西行上人、俊頼、頼政卿などの心より及び難きことなれど羨しく存ずるなり。唯見るまま、心に浮ぶまを言ひあらはし、然も詞のふしくれちぢまず可聞也。」とっており、好忠、俊頼らと西行とを並べ

論じ、これらの歌人に共通するものを鋭く指摘している。特に「詞のふしくれちぢまず可聞也」と表現の自由なひろがりに着目してこれらの歌人の特色を批評していることは注目に価しよう。

へじや世にいかせましと思はねど問はば答へよ四方の山彦  
有れば厭ふなければ忍ぶ世の中に我が身ひとつはすみわびぬや  
は

飛鳥の心は空にあくがれて行方も知らぬ物をこそ思へ  
惜しからぬ命心かなはずばありへば人に逢瀬ありやと  
味気なし身にます物は何かありと恋せし人をもどきしかども  
君恋ふる心はそれに碎くるをなど数ならぬ我身なるらん

『曾丹集』の右のような歌は、好忠の発想と表現の特色のよくあらわれた歌であるが、こうした歌から西行の作品に流れ込んだものを見出すことは難かしくないとと思われる。

源俊頼は、歌人としての形成期に西行が最も大きな影響を受けた歌人と考えられており、西行における俊頼の影響については、先に考察したこともあるので、ここで改めて論ずることは省きたいと思う。

西行歌風の表現上の特色の一つをなす独自あるいは自問自答の歌がとくに出家前後の時期にしばしばあらわれることをさきに指摘し、次に歌風形成期に西行が影響を受けた歌人の作品の中に、そうした表現の先蹤をなすものがあるか否かを探ってみた。その結果、『古今集』の雑歌や和泉式部の恋歌、曾弥好忠や源俊頼の述懐歌の中に、発想や表現において西行の作品と共通するものが存在することを発見し得たように思われる。こうした先行和歌の影響を受け、しかもそれが西行の知的、思弁的な資質と結びついたところに、独自や自問自答の表現形式は、彼の歌風の一特色として定着していっ

たものと考えられよう。そこで、次に初期の作品に限らず、広く西行の全作品の中に独白や自問自答形式の歌を求め、その意義について更に検討を加えることにしたい。

## 五

西行の恋歌の中に独白あるいは自問自答の形式を有するものを求めるなら、次の諸作などがその好例といえるであろう。

- 1 契れどもながき心はいさや君さりとてさはといさむばかりぞ
  - 2 うきをうしと思はざるべき我が身かはなにとて人の恋しかるらむ
  - 3 なげけとて月やは物を思はするかこち顔なるわがなみだかな
  - 4 なげくともしらはや人のおのづからあはれとおもふこともあるべき
  - 5 なにとなくさすがに惜しき命かなありへば人やおもひしるとて
  - 6 うきよをばあらればあるにまかせつつ心よいたく物なおもひそ
  - 7 さらにまた結ばれゆく心かなとけなばとこそ思ひしかども
- 右の恋歌が『新古今集』の恋歌などとその趣を異にしていることは一見して明白であると思われるが、とくに西行の恋歌の著しい特徴をなすものはその思弁的な要素であろう。その点でこれらの恋歌は述懐歌に近い性質をもっている。とりわけ1などが難解なのは内容にかなり複雑な心理が盛り込まれているからであり、7も軽い内省の気分で詠み下されたというよりは、前方に長い思索の時間が存在し、それが上句へ連続して論理的な要素の濃い作品を形成しているのである。

2、3、5は三句切の歌であり、こうした歌の表現構造は、冒頭

の歌の構造と近似したものがあつた。ただし、冒頭の歌では、上句が命題の提起で下句がその帰結という構造であつたのに対し、これらの歌は上句に論理の帰結（結論）を据えた形を示している。しかもこの結論に到達するまでに思索の過程をふまえているのであるから、こうした歌は全体として上句が重く、やや悔渋な傾向を免れぬ面もあるのである。

だが西行の恋歌は必ずしも、論理的な要素のまさったかわいた歌ではないことに注意したい。たとえ、2や6の歌は上句には論理性が濃厚である反面、下句には強い情感の漂っていることを否定できない。そして全体として思弁的な歌でありながら、強い抒情性に裏打ちされた独特の世界を形成しているのである。3の歌が、上句ではむしろ理知的な要素が強いにもかかわらず、下句の強い感傷性によって感傷的な歌として古くから理解されてきたのも、西行の和歌における如上の特色に起因していると思われる。

思弁的な要素をもちながら、全体としては抒情性のまさった恋歌としては、次のような作品があげられる。

- 1 人はうしなげきはつゆもなぐさまずさはこはいかにすべき心ぞ
  - 2 かきみだる心やすめのことぐさはあはれあはれとなげくばかりぞ
  - 3 などかわれことのほかなるなげきせでみさをなる身に生れざりけむ
  - 4 あはれあはれこの世はよしやさもあらばあれ来む世もかくや苦しかるべき
- 右の歌の表現は、独白の形をとっているとはいへ、静かに内面の思いを詠出したつづやきの歌とは対極をなすものであり、叫びの歌というにふさわしいものである。



題詠による恋歌の世界は別として、現実の恋愛体験に即して詠まれた一般の恋歌と在俗時代に恋愛の体験はあったにせよ、出家後は内面に屈折した思いを独白の形で詠んだ西行の恋歌とを同じ次元で論ずることは誤りであるかもしれない。一方は対詠であり一方は独詠であるという歌の機能にもかかわる問題もある。しかし、それはそれとして、西行の恋歌の中に、当時の恋歌とは全く形も質も異なる歌が存在することは紛れもない事実である。それらはむしろ恋という心理的状况を設定することによって内面の思いをさまざまな形で表白しようとする試みであり、繊細優美な恋の情趣を歌い、完成された美的世界を形成しよう<sup>(13)</sup>と意図した当時の恋歌とは、全く領域を異にするものだったのである。それゆえ西行の恋歌は、自己凝視の歌というにふさわしく、知的、思弁的な傾向を持ち、むしろ述懐の歌と重なり合うところが大きい。従って右の恋歌にみられた独白の表現形式を述懐の歌や無常の歌と同列に論じたとしても、あなたがちまちがいではあるまい。

西行の述懐歌の内容と表現の特色については、先に考察したこともある<sup>(14)</sup>ので、それに譲ることにして、ここでは、独白あるいは自問自答の形式が顕著にあらわれている作品をいくつか例示するにとどめたい。

ながらへむとおもふ心ぞつゆもなきいとふにだにもたへぬうき身は

さてもあらじ今みよ心思ひとりてわが身は身かと我もうかれむ月をこそながめば心うかれ出でめやみなる空にただよふやなぞ

おろかなる心のひくにまかせてもさはいかにつひの思ひは次に、述懐の歌との関連で、無常の歌に目を向けてみると、次のような歌を独白あるいは自問自答の歌の好例とみることができよ

う。

1 あればとてたのまれぬかなあすはまた昨日をけふといはるべければ

2 いづくにかねぶりねぶりて倒れふさむと思ふかなしきみちしづのつゆ

3 おどろかむとおもふ心のあらばやはながきねぶりの夢も覚むべき

4 うつつをもうつつとさらにおほえねば夢をも夢と何かおもはむうらうらと死なむずるなどおもひとげば心のやがてさぞとこたふる

6 いひすてて後のゆくへをおもひ出でばさはいかにうらしまのはこ

7 世の中の憂きもうからず思ひとけばあさちにもむすぶ露のしら玉

8 さてもこはいかがはすべき世の中にあるにもあらずなきにしもなし

右のうち、4、5、6の三首は年少期の作であるとされている百首歌の中の「無常十首」にあるが、その他は制作時期が知られない。おそらく青年期から老年期に至るさまざまな時点で、西行はこうした種類の歌を詠んだものと思われるが、とくに出家前後の西行がしきりに詠んだ「仏教的の人生観照の歌」がこれらの中にも混在しているとみてよいであろう。生来の思弁的な資質は、青年期の苦悩を経験し、更に仏教的な思惟の方法と結びつくことによっていっそう強まっていったものと推測され、右の無常の歌は、そうした思考の痕をとどめたものとして注目すべき作品であろう。

西行の歌を理解する上で、彼が仏道を修行する僧侶であったという事実は、当然重視されなければならない。そして、西行歌風の形

成過程において、仏教的な思考の方法がいかに関与しているかという問題をわれわれはもう一度検討し直す必要があるのではなからうか。その手がかりとして、たとえば『聞書集』の「地獄絵を見て」の連作などが考えられるし、<sup>(15)</sup>かなりの数に上る彼の法文歌などに着目する必要もある。<sup>(16)</sup>

たとえば法文歌の中に次のような作品があることに注目したい。

菩提心論に乃至身命而不恠惜の文を

1 あだならぬやがてさとりにかへりけり人のためにも捨つる命は  
疏文に心自悟心自証心

2 まどひきてさとりうべくもなかりつる心をしるは心なりけり  
方便品深着五欲の文

3 こりもせでうき世のやみにまがふかな身をおもはぬは心なりけり  
法師功德品 唯独自明了 余人所不見

4 ましてましてさとる思ひはほかならじ我が嘆きをばわれ知るなれば  
流界三界中 恩愛不能断 弁恩入無為 真実報恩者

5 捨てがたき思ひなれども捨てていでむまことの道ぞまことなるべき  
身相神通樂

6 ゆきてゆかず行かでもゆける身になればほかのさとりもほかのことかは  
行基菩薩の、「いづれの所にか一身をかくさむ」と書きたま

ひたるを思ひ出でられて

7 いかがすべき世にあらばやは世をも捨ててあな憂の世やと更に思はむ

法文の句に基づいて詠む法文歌は、ほんらい、論理的な色彩の強いものである。しかし新古今時代の法文歌には、単に法文の句に依って観念的に仏教の教理を説いたものや、単なる法文の解釈に終っているものが少なくなく、総じて観念的な傾向が強い。その中にあって右にあげたような西行の法文歌は、きわめて論理的な構造をとりつつも、強い実感に裏付けられて、独自の領域を形成していると思われる。2、3などの下句にみられる独自の詠嘆の響きは、彼の述懐の歌の世界にそのままつながるものである。4の激しい感情表現の調子なども単に仏教の教理への讃嘆という面から理解するべきではなく、わが身への思いの高潮した心から生れたものであり、ある種の恋歌などと共通するところがあるといえよう。また、5、6、7の歌にみられる自問自答や独白などの表現形式は、まさしく冒頭に掲げた述懐の歌などに重なり合うものといつてよい。

推定の域を出るものではないが、出家前後の西行は、こうした種類の歌をかなり多量に詠んだのではあるまいか。「捨てる」ということをめぐる自己内部における問いと法文の語句などを対置することによって、西行はそこにおよそ歌にもならぬような思索の歌を数多く詠出したものと思われる。そしてそれらの歌における表現形式がやがて西行の歌風の中に、次第に定着してゆく過程を、われわれは西行の法文歌や述懐歌の中に認めることができるのである。

身を捨つる人はまことに捨つるかは捨てぬ人こそ捨つるなりけり

右の歌によって歌人として出発した西行は、こうした自己自身への問いを生涯持ちつづけた歌人であったといえる。この、わが身の在り方への問いが終生彼の歌の主題であったことは、晩年に詠まれた風になびく富士のけぶりの空に消えて行方も知らぬわが思ひか

な  
 という歌によっても知られる。西行の歌は、いわば、自ら問い自ら答えた思索の痕跡であり、秘かにわが思いを吐露した独白の世界である。彼の歌に自問自答や独白の表現形式がしばしばあらわれるのは、こうした歌の内容が、おのずと規定したことであつたといつてもよいであろう。

## 註

- ① 峯村文人氏「西行の作風形成」(『言語と文芸』第七号) 他。  
 ② 「新古今集」(『岩波講座・日本文学史・中世Ⅱ』)。  
 ③ 「花にそむ」と「ほとけには」の二首は、『千載集』では雑の部にあり、述懐的な歌の中に並べられている。撰者の俊成も、こうした歌を述懐的な歌として評価していたことを示している。  
 ④ 『西行の研究』  
 ⑤ 『山家集』(日本古典全書) 頭註。  
 ⑥ 川田順氏『西行』他。  
 ⑦ 前掲書。  
 ⑧ 風巻景次郎氏『西行』。  
 ⑨ この時期における西行の生活と歌について、風巻氏は前掲書で次のように述べている。「西行は、徳大寺圏の歌人付合いなどに満足しながら、いちぢな修業も仏学もしはしない。そして歌ばかり作っている。多くは彼の追憶思慕の独語である。あるいは彼の肉体の独語であり、あるいは彼の仏教的な人生観照の独語である。人に見せるべきではない。歌稿はひそかにたまるばかりである。」  
 ⑩ 西行は、大原三寂らを中心とする小グループの私的な歌会にはしばしば出席しているが、歌合には参加した記録がない。こうしたことから、西行が、常に私的な場において作歌する歌人であつたことが知られる。  
 ⑪ 拙稿「西行における源俊頼の影響」(『文芸論稿』創刊号) 参照。  
 ⑫ 久保田淳氏は「院政末期に生き、宮廷和歌の圏外にありながらも、圈内の特定の人々とは交渉を保ち、又数寄者の群に立ち混つた西行の恋歌に、例へ少量でも同時代人のそれに類似した傾向を有するものがあることは、むしろ当然であろう。重要なことは、同時代人の恋歌と重なり合はない別の領域に属し、しかも作者自身のひそかに恃むところのあつた作品の評価にあるのではなからうか。その領域とは、心自体への省察が極度に深められた孤独な魂の領域であつたと考へる。」(『西行の恋歌について』『国語と国文学』昭37・11) と、西行の恋歌のこうした特質を指摘しておられる。  
 ⑬ 拙稿「西行の述懐歌」(『文芸研究』第53集) 参照。  
 ⑭ この歌は、出家前後の述懐歌「おもへこころ人のあらばや世にもはぢむざりとてやはといさむばかりぞ」と似ており、ほぼ同じ頃の作かと思われるが、西行の歌の中でも難解なものの一つである。窪田章一郎氏は「世捨人らしい正しい心を理解して身につけ、この我が身は在俗の頃の身であろうか、そうではないのだと確かめ、世捨人の我は旅にさまよい出よう。今のままでは居るまい、おっつけ見ていくれよ、というのであろうか、」と試解を立てられたが(『西行の研究』)、論理が複雑でかつ詞遣も屈折し、解釈には困難がつきまとう歌である。  
 ⑮ 「地獄絵を見て」の連作については、片野達郎氏と山木幸一氏の論考(『和歌文学研究』第21号、第22号) にくわしい。  
 ⑯ 山木幸一氏は「西行歌風の形成」(『国語国文研究』第27号) において、西行和歌の法文歌からの影響を指摘された。

**Summary****Characteristic style of Saigyô's poems**

Shinichi NISIMURA

Among the poems by Saigyô are found many which can be termed "monologic". This is noteworthy especially in his early productions. The tendency may be partly because he had an intellectual or speculative inclination by nature, but it owes greatly to his deep meditation in his youth on his existence which is reflected in his works. At the same time it cannot be denied that he was somewhat influenced by the contemporary poems and by those in the preceding era. Characteristic style of Saigyô's poems lies in his "monologic" expression above mentioned and so by paying attention to these kind of poems we can approach the very essence of his poetry.